

ワロン人格論における写鏡関係

— 成人教育論序説 —

1 はじめに

フランス心理学界の指導者であったアンリ・ワロン（一八七九～一九六二年）は、従来、ジャン・ピアジェと共通の土俵にたった論争を中心に評価されることが多かった。児童の人格の発達の「起源」は、本質的に社会的な「自他未分の情動的混淆状態」（ワロン）なのか、それとも「自閉性」「自己中心性」（ピアジェ）なのか。他者を鏡として初めて児童は自己分裂するのか、それとも自己中心性を「非人称的概念」の助けを借りて社会化するようになるのか。要するに、児童を発達心理学の観点から如何にとらえるかという前提が暗黙のうちに置か

鈴木 一 策

れていたといえよう。この時、特にワロンの他者と自我との把握の仕方そのもののある種の、動搖に焦点があてられない傾向が生じたと私は考える。⁽¹⁾ 何よりも、心理学のみならず、伝統的哲学をも、ほ、巻きこんできた、自己は結局直接に知ることができるといふ臆見を根本から問い直そうとしたワロンの努力に、彼の他者の捉え方の微妙なねじれを讀みとらねばならない。

このねじれは、起源^{ゲネズ}としての児童から約束^{テコロス}の地としての大人への発達^{II}移行を見渡すクロノスの時間を地盤とする発達心理学には収まらない、乳児から成人老人、精神障害者をも含む、人間存在の根底を探りだす苦闘から必然化したものではなかったか。ワロンの人格論は依然

として心理学の枠内にあるとはいえ、そのねじれに留目する時、アレクサンドル・コジエフのヘーゲル『精神現象学』解釈を踏まえ、欲望を軸としてフロイトを読み直したジャック・ラカン（一九〇一—一九八一年）やルネ・ジラルルの現代的知見とつきあわせる道が教育論の内部に開かれるかもしれない。それはワロンが日本の教育界では重要な位置を占めてきたと私が判断したためである。この道は、欲望や性や競争を軽視した、主知主義的な心理学、認識論を有効に批判するものになり得たならば、従来の学校中心主義教育のみならず、「生涯教育」の名でくられつつある成人教育をも違った角度から展望するものとなる。

学校の狭い枠を取り払ったと自称する「自己教育論」、あるいは、労働（生活）と教育の結合を伝家の宝刀として、初期マルクスの疎外論や『資本論』の全面発達論に依拠し、主として教育政策的抵抗を試みようとするエツトール・ジェルビの生涯教育論等は、意外な程素朴な認識論に寄り添っていないだろうか。小論が成人教育論「序説」であるのは、「自己」教育論が前提とする主体の自律性や主体の解放というヒューマニズムを問い直す含

みをこめてのことなのである。

(1) 波多野完治氏のワロン解釈に異を唱えた玉田勝郎氏の『子ども認識の分水嶺——ワロンに学び、ワロンを越える——』（明治図書）も「ワロンの立言は、しかしながら、〈象徴機能〉というものに、ある種の特権的な位置を与えてしまっている」（同書、二一—二二ページ）とワロンに距離をとったものの、人格論は前提されている。

(2) E・ジェルビ『生涯教育——抑圧と解放の弁証法』前平泰志訳（東京創元社）。差別と抑圧に抗する「自己教育」が至る所で語られている本書は、その「弁証法」の何たるかを一切提示していない。

* 断りのないかぎり、以下の引用文中、。は原著のイタリック体を、。は引用者の強調点を、（……）は引用者の註解を表わす。また引用文はすべて私の訳文であること、邦訳のページを挙げなかったことをお断りしておく。

2 ワロンの「自己内他者」論

ワロンは、主として情動論を扱い、鏡を前にした児童の挙動の観察を踏まえて「自我の成立」を論じた『児童における性格の起源』（一九三四年）を別とすれば、数多くの小論を人格論に捧げた。しかし、私はそのうち二つだけを取りあげる。両者は深いつながりを持ち、しか

も他者論の核心に迫るきわどい論述からなるからである。一つは『自我 *moi*』の意識において『他者 *autre*』の果たす役割(一九四六年)、いま一つは「自我の諸水準と動揺」(一九五六年)である。

ワロンの出発点は、言うまでもなく、自我は直接知ることができ、他者は類推によって間接的にしか知ることができないとする常識を覆すことであった。だから、彼は、まずもって、他者は主体の外部ではなく、主体の内部に、主体の自己分裂(主体自体に裏ができてくること)の結果としてたてる必要があったのだ。第一論文で「自己内他者」(小文字の *l'autre*、ないしはややカタゴリー的な内的他者を示すためにラテン語経由の *l'alter* が用いられている)または、ピエール・ジャネがいった「自己内他者」(中世のスコラ学者にびったり寄り添い口述筆記する書記官)が挙げられた理由は疑問の余地がない。

しかしながら、主体ないしは自我の「内部」に他者をたてても、この他者は、いかにも外部の生々しい他者と区別し難い代ものであった。そこで、外部の具体的他者と区別された内的他者性にこだわると、その他者性は、

まとまりをもち意志をもったとされる自我の不意を打ちにやってくる脱肉化した声、しかも外部からやってくる声にこそふさわしいと思えてくるのであった。先に私が「よじれ」といったのはこの事である。この間の事情を、まず第一論文にあたって確かめてみよう。

ワロンの主眼は、主体の自己分裂とその成果としての「自己内他者」が自我と他者たちとの媒介者である、ことにあった。

「なるほど、これ〔自我と自我内他者との反転〕は、互いに外的な人物の間に、個人とその実際のとりまきとの間に確立することのできる、確立されざるをえない関係をあらわしたものと、いう向きもある。程度の差はあっても、生来互いに好都合の状態にまともろうとするかと思えば〔たちまち〕主従の状態に反転してしまうといった傾性をもった個性が相互に影響しあうというわけだ。しかしながら、この関係そのものは、各人が自己内に担っている他人の幻影(*le fantôme d'autrui*)を媒介としてるように思われるのである。私たちと他人との関係の水準を規制するのは、まさにこの幻影が蒙る強度の変容なのだ。」

ここでは、後に述べることとかかわって、ワロンが「強度」といったことに注意されたい。そこでこの他人の「幻影」はどうやってつむぎだされてくるのか、その点の叙述をみてみよう。

「結局、周囲の人々は、主体が自己を表現し、自己を實現するためのきっかけないしは口実でしかない。それなのに、主体が周囲の人々に自分の外なる生命と一貫性を付与できるのは、主体が自己内で、自分とその欠くべからざる補完者とを区別しているからなのである。この「自己内の」本質的に疎遠なものこそ小文字の他者 (l'autre) なのだ。主体が、これまでに實在人物とかわしえた習慣的關係をいわば捨象してひき写されたものがこの区別なのではない。もっと内的な二項の分極化の結果がこの区別なのだ。二項は二律背反的であるのに、否そうであるからこそ、一方なしに他方が存在しえないといったものである。一方の項は、自己自身の同一性を確定する項であり、他方の項はこの同一性を保持するためにこの同一性から排除しなければならぬものを要約している⁽⁴⁾」。

引用文から、「自己内他者」は、主体の内なる二項の

分極化からつむぎだされたもので、所謂人間關係の反映でないことが強調されていることがみてとれるであろう。しかし、主体のいかなる動き——とりあえずこうとだけ言っておく——がその分極化をもたらすかは明示されていない。その点はひとまずおいて、次に、ワロンが、自我と「ソキウスつまり自己内他者」との緊密關係の「強度」をひきあいにした文脈をたどってみよう。ワロンは普通の程度と、異常ないしは病理的な程度とを比較している。

「精神生活にあつては、ソキウスつまり自己内他者が自我の絶えざる相棒である。ソキウスは、自我に伴なう支配と完璧な統合との意欲によって、通常ならば、縮小され、表に現われず、抑圧され、いわば否定されてはいる。そうであるにもかかわらず、どのような熟慮も、どのような逡巡躊躇もいわば對話であり、時として程度の差はあれ、言葉にでてくるような自我と反対者との對話なのである。優柔不断の折、重苦しくも責任を問いかけてくる深刻な状況に巻きこまれた時、對話はもはや内部のものではありえず言葉となつてほとぼしる。その對話では複数の人物が活気を帯び、あるいは攻撃性をさえ募

らせて問いかけ答えあっているのだ。すなわち、対話者たちは、他の人格性を、主体に対する一種の帰属状態ないしは服従状態へとおいつめているのだ。もっとも主体は、反転的に陣地をいれかえることはできる。こうしたあちらに行ったりこちらに来たりのおかげで、自我の統一は危険にさらされていないように思えるのである。⁽⁵⁾では、異常の時はどうか。

「ところが、両天性〔闘争性〕の感じがもっと厳しくなることがある。ソクラテスの守護霊の聲がこの種のケースである。ソクラテスにとって、このダイモニオンの介入は外からの介入という性格のもので、ソクラテスが重大な状況の中でためらっている活動を、よしなさいと生みだされてくるものであった。ジャンヌ・ダルクの聞いた声も、神秘的な解釈がしばしば与えられているにもかかわらず、同じような精神の裏打ち分裂とかかわっているといえよう。⁽⁶⁾」

更に、ワロンはクレランボーをひいて、患者がかいならしてきたと思っていた状態に反逆するように不意に患者を非難する他者を挙げる。この場合は、先の正常な時と異常な時にいわば共通であった主体の「ためらい」

も入る余地はなく、自動的に他者が外部から介入してくるといわけだ。

「これはまた、患者が、社会関係の中で募らせてきた不信、chanceでもあって、これがソキウスを介して表てだった形式で物語られている。この形式は、少くとも初めのうちは、非常に包括的な、突飛な、匿名的な⁽⁷⁾だ。」

こうして、正常な時における円卓をかこんだ時のやや激した内的対話者、ソクラテスの異常な時の外からの声、病理学的な時の、外部から自動的に介入してくる声、これらの間に強度という量的規定性が打ちたてられた。そして、内なる他者にしては生々しい肉体を備えた正常時の「自己内他者」と、肉体を備えた他者と極端に違った脱肉化した声——いかにも内なる良心の声といたく異なる声——でありながら外部から不意にしか襲ってこない「自己内他者」とが、同じ「自己内他者」の種差とみられることになったのだ。

しかし、ワロンはどこかやましい。落ち着きが悪い。そこで第二論文——第一論文より詳細にわたり長文——が書かれねばならなかった。

第二論文では、依然としてあいまいさはぬぐえないが、小文字の「自己内他者」と大文字の「自己内他者」との区別らしきものでしており、それよりなにより、「自己内他者」はいかにして必然化するかが、かの「自己分裂」に安易に依拠しない論調で指摘されている。そのくだりを、しかも第一論文の参照を指示しているくだりを引用しよう。

「少くとも、子どもに対し他人が〔家族内におけるように〕このような妥協せぬ固定性を示すために、子どもは結果として、内的な大文字の他者を求める気にさせられる。それまでは、反対の、ないしは相補的な二つの役割を反転させる……ことがあった。大文字の自我が確定された時から、はもう片方しかなくなるのだ。しかし別の方がすっかりなくなるわけではない。それはもはや大文字の自我 Ego ではなく、大文字の他我 Alter Ego になっている。これがピエール・ジャネのいう『ソキウス』だ。これは、大文字の自我 Moi の分身であり、その自我に付随し一身同体であるが、必ずしも合致するとはかぎらない。否、それどころではない。それは、心の内の討論の支え、疑念を残した決定に異議を唱える支え

だ。時として、これはせきを切って迫り、思考の反響や強迫、虫のしらせ、脅迫となることがある。大文字の自己内他者は、反省の行使とかくも結びついていて、両者の器質的基礎が相互に含みあっているようにみえる程だ。」⁽⁸⁾

引用文の末尾に第一論文への参照が指示され、前論文のあの内なる他者と外なる声とのずれを統一する意図がそれとなく感ぜられる。それにしても、固定的な家族の布置関係が、子どもに「内なる大文字の他者」を探究させるきっかけであるとは、しかもその探究は、成人一般にこそ妥当する「反省の行使」と結びついているとは、なんとという抽象的切り抜け策だろう。だが、ここでしかと見定めておかねばならない。この反省の担い手である「大文字の自我」の確定——それは三歳頃の人格の危機——いわゆる第一次反抗期という観察的事実に安座して、いわれている——から反転して、「大文字の自己内他者」の探究が暗示されていることを。後に触れるが、この反転——という両義的概念が内と外の二分法を支える御都合主義の概念であったのだ。

ワロンは、同じ不動の家族関係から、今度は、子ども

は内にはなく外に向かうと平然と述べてしまふ。

「子どもの大文字の自我は自分自身にのみ依拠したいと望む〔自我主張〕が、家族の布置関係の中で動きのない立場にあるために、不可避的に隷属状態が強いられていた。子どもをこの矛盾からひきだすことに至るのは、前からつながりのない人物たち、即ち大文字の他者達。Les Autres の発見によってなのだ。」⁽⁹⁾

前の叙述とこのくだりとは、明らかに方向が逆である。前者は反省的な「内的他者」の探究を示し、これは、生々しい外的他者への依存——反省どころか、同一化というもたれかかり——を指摘しているのだから。だが、一見したところ矛盾する二つの叙述は「反転」によって統合可能になるのである。

ワロンは、第二論文にあっても、あくまで「大文字の内的他者」を内界と外界との媒介者、「蝶番」^{シヤルニエル}と設定し続ける。微妙にも、「大文字の他者は必ずしも内的な大文字の他者ではない」と言った時でも、それは、小文字の具体的個人でもあり、集団でもあり、「主体と大文字の他者との関係は匿名的に、あるいはカテゴリー的になる傾向がある。」⁽¹⁰⁾ことを言うためであった。外部の個

人や集団に受肉する「大文字の自己内他者」は、しかし、ダイナミックな反転をくりかえす。

「大文字の自己内他者は、腹心の友として、助言者として、時にはスバイとして、内にとどまったり、外にまわったり、実際の人物に受肉したりしうるのだ。」⁽¹¹⁾

この反転というアルキメデスの支点がワロン人格論を支えている。それは、大文字の他者と「社会的な大文字の自我」⁽¹²⁾との「連続性」を暗黙の裡に立てている。そこから、大文字の自我と他者との拡大と縮小との関係という強度（量的規定）に基づいた平板な、ダイナミズムを装ったワロンの展開が必然化する⁽¹³⁾。

それにしても、この「反転 alternance」という概念は、どこからでてきたのであろうか。この概念が多用されている『子どもの精神的発達』（一九四一年）にあたって、確かめてみよう。

エミール・ジャレイも⁽¹⁴⁾指摘しているように、本書でワロンは、フロイトの超自我（典型的な大文字の自己内他者！）の昇華のプロセスと、それに密接にからまる両個性の感情とを気にかけて、両個性と反転とをどこか重ねている節がある。ワロンとフロイトの葛藤関係は重大

なテーマの一つであるが、ここではとりあげない。肝要なのは、フロイトの両価性とも重ねられるかの「反転」が、まるでヘーゲルの「否定の否定」のように、人格の進化の原理にまで祭りあげられていることだ。

「人格の進化においても、知的な次元でも、同じ反転がある。」⁽¹⁵⁾

「様々の反転、alternatives diversses を経て始めて、様々の存在や物と子どもとの関係が、いかなる認識にも意識にも不可欠な基礎と普通みなされている枠組に組みこまれるのは確かだ。心的進化の各水準で、様々の反転が——明らかに、巻きこまれていく活動性と形成途上の構造との新しさに関係した形式で——反覆され、役割を演じている。」⁽¹⁶⁾

「移行の中間段階のいづれにあっても、常に同じ反転が作用している。」⁽¹⁷⁾

ただし、この同じ反転に量的差異は指摘されている。

「振幅の大きさに程度の差はあれなんらかの往還運動 va-et-vien が無いわけでは無い。」⁽¹⁷⁾

「こうして、最も生理的あるいは初步的機能から、最も多元的な条件をもち最も複雑な帰結をもたらす機能ま

で、個人に固有の内的な成長と、個人の目標と手段との外界への拡張とを反転的にひきおこすあの反転が階梯をなして並んでいる。階梯の一番下では、この反転も、自己同一的に反覆されるように見え、同じ回路の中で、単調な結果の向きをかえているだけに見える。「だが」長い目でみさえすれば変化は目につくようになる。」⁽¹⁸⁾

多くを語る必要はない。ワロンは、発達心理学が腰をすえている等質的直線的クロノスの時間を、この往還運動⇨反転でようやく幻想的に支えようとしていたのである。これは、彼の「比較心理学」という名の観察の立場——観客席に立った気になった——から必然化したものではなかったか。しかし、私は、その立場がよじれていることをここでは強調したいのである。そしてこのよじれを「折り返し」したジャック・ラカン（一九〇一〜一九八一年）、フロイトへの回帰の中で、フロイトさえも「折り返し」、他者の問題を、主体の無意識を根本的に実体的ではない何かとして把握直すことにより深化したジャック・ラカンとワロンとの断絶の相を確かめる必然性を、ワロンのこの「よじれ」に託したのだ。

3 想像的他者と大文字の他性

ラカンを『フランス百科辞典』第八卷「心的生活」(一九三八年)に登用したのは、ワロンであった。ワロンがラカンの才能を認めたことは、しかし、ラカンを理解することではなかったといっても過言ではないだろう。公的な論争が二人の間に交わされた事はなかった。しかし、管見のかぎりでは、ワロンは唯一つ名指しでラカンを批判した論文を残したのであって、それは「児童における自己身体の運動感覚と視覚像」(一九五四年)であった。ここでは彼はラカンの初期の代表作「私の機能の形成体としての鏡の段階」(一九四八年)および「精神分析における攻撃性」(一九四八年)を亜然とするほど軽く批判していたのである。これに対し、ラカンは「攻撃性」の論文でラカんに敬意を表し引用している。⁽²²⁾しかし、以上の二論文に加えて『エクリ』全体やセミネール類をみるかぎり、ラカンはワロンを徹底的に心理学者の一人として批判し、名を挙げずとも、ワロンの理論的地盤を根底から揺さぶっていると思わざるをえない。ただ、ラカンは、ワロンを充分吸収し、私の所謂「折りずらし」を

試みていた事は確かだ。ラカンは独得のひねった癖のある文体で私を困らせたが、教祖的な奇人とみなす訳にはゆかない。信じ難い程の重厚な内容を、短い文句に圧縮させ、文献研究と臨床とを十二分に踏まえた彼の『エクリ』とセミネールが依然として謎の部分を多く残して私には歯がたたないが、ワロンの扱いは実に誠実だと思う。まず初めに、先に挙げたラカン批判のワロンの文章をとりあげよう。

「……精神分析家のように、そこ〔妄想や悪夢等〕に、幼児期の苦悶への回帰をみたり、子どもは身体の一を求めて苦吟しているとみなしたり、ラカンのように、『身体の』分解、八ツ裂き、去勢、腹裂き、貪婪、埋葬」を云々することは、子どもの行動に全く想定できぬ悲劇を云々することである。知覚―運動の習得の際に示すあの好奇心の目覚め、しばしば喜ばしい、好奇心の目覚めこそが、自分自身ととりまく対象とへの探索を活気づけているからだ。身体の解体を感じるためには、子どもには自分の身体総体についての前直観のようなものが必要となる。⁽²⁵⁾」

引用文中の、ラカンの文章は「精神分析における攻撃

性⁽²⁶⁾」からのものである。批判点は、ラカンの「寸断された身体」論は大袈裟だ、に尽きるといえよう。子どもは「しばしば」自分の身体像を楽しそうに探索するから悲劇の余地はないこと、分断されたと感じるからには、その前に身体総体の「前直観」が必要なこと。こうした物言いは、実はワロンの観察の立場、その前提たるクロノスの時間を思わず洩らす類いである。「前直観」など想定し得ないと断言する人は同時に、身体像の未分化な前段階と、分化した後の段階とを想定する人でもあり、子どもについての観察的事実をラカンに対置して批判した気である。

しかし、ワロンが幾度も引用した同じ事実⁽²⁷⁾に依拠して、ラカンは「寸断された身体のイマージュ」と共に「攻撃性」を指摘したのであり、約束の地から「未分化」と規定された身体像とは異質の次元を照らしだしていたのだ。その事実とは例の転嫁⁽²⁸⁾——相手の子を叩いておいて自分が泣く——や嫉妬⁽²⁹⁾であり、これはむしろ頻繁に子どもをとらえ、喜ばしい探索どころのものではない。

ラカンは、カインの兄弟殺しとともに、この自他の「未分化」故の転嫁症と総括されてきた現象を、「攻撃性」

の相の元に照射するのだ。

「小さな女の子は、特に残酷な性質⁽³⁰⁾ではないが、まだ歩くこともできない年の頃、疎開先の田舎の庭で、隣家の小さな男の子の頭にかなり大きな石をしつこくぶつけようとした。しかも実に平然と。この男の子にその子は同一化していたわけだ。カインの身振りは完全を期した運動であるどころか、全く思わず知らず実現される、そう私は断言してはばからない。女の子は罪の感情などおってはいないのだ——『あたち、フランシス、頭、つぶちゅ』。その子は確信をもち平然とそう言ったのだから。だからといって、その子が将来犯罪者になるわけではない。その子は、ただ想像界における人間存在の最も根本的な構造——疎外の座となっている者の破壊——を表現しているだけなのだ。」

これは一九五四年のラカンのセミナーから引用したものである。更に嫉妬についての叙述も念のため引用しておこう。

「私共はここで素朴な心理学者でも主体の行動について観察できるものと合流する。例えば、聖アウグスチヌスは、私がしばしば取り上げてきた一節の中で、小さな

子が自分の同類にあの破壊的な荒れ狂う嫉妬を感じずると指摘している。しかも、同類が母のオッパイに、即ちその子にとって大切な欲望の対象にすがりついている時に特に感ずると。」⁽³⁰⁾

この攻撃性(事実上の肉体破壊の攻撃はその極端なケースにすぎない)を根本構造とするものが、ラカンの所謂想像界で、小文字の他者^{イマジンナール}想像的他者^ドどうしの両数的^{デュアル}闘争的關係の世界だ。それは「写鏡関係」などというなまやさしいものではない暗い欲望の世界だ。先に引用したワロンの文章には(注(18)が付されている)、「同じ回路」のくだりがあったが、ラカンは想像界を、移行や脱皮など不可能な閉じた回路だと明言していることも注目されねばならない。

「起源にあっては、つまり言語活動以前には、欲望は鏡の段階という想像界における關係の次元、小文字の他者へと投射され疎外される唯一の次元にしか存在しない。この場合、欲望が惹き起こす緊張は出口をもたない。即ち、この緊張は——ヘーゲルが教えているように——小文字の他者の破壊以外の出口をもたない。」

ここに、ヘーゲル的な概念(実体^{グロリア}≡主体)の「否定の

否定」による移行^{トランジション}≡自己復帰の弁証法をみるむきもあるかもしれないが、決してそれはできない。次の文を見られたい。

「そこには、人間存在間の破壊的で殺人的な関係がある。しかも、このことは、表面に出ずとも常にそこにあるのだ。」⁽³²⁾

それ故、想像界と象徴界^{サンゴリア}——後述——との間にヘーゲル的な止場^{アウフヘーベン}をあてはめることは勿論、未分化な発達段階を「鏡の段階」(次元^{プラン}と言いかえられている)に読むことも全く不可能なのだ。では、常に既に言語活動を根本とする象徴界に生きる我々の想像界とはどのようなものなのか。ラカンは鋭くこう言う。

「私共は、博愛主義者や理想主義者や教育家さらには改革家の行為の底に攻撃性を見抜いている。」(「鏡の段階」論文)

想像界とは、このように献身性や進歩性に、ヒューマニズムに顔をだし、分析家を「知をもっている」と想定された主体³⁴として患者が甘えて行なう「同一化」にも、逆の「反撥」にも貫ぬき、極端な攻撃から、樂しげないないばあ遊び」にまで貫ぬくことになる次元なのだ。

前節でワロンの「ねじれ」を指摘したが、「自己内他者」にしては余りにも生々しいあのワロンの他者が、ラカンによって想像界として端的に（屈折してはいるが）指定されたのだ。そして、「自己内他者」であるはずなのに不意に外から声として襲ってくる他者は、ラカンによって、人格性を奪われ、象徴界として、後には記号表シニフィヤン現レが雑多にころがる宝庫トレンネルである大文字の他場（L'Autre）⁽³⁵⁾として指定されるのだ。これをラカンによるワロンの「折りずらし」という。象徴界は、主体を否応なく記号表現の連鎖に巻きこむ場であり、「反省の主体」をひきずりこみ、脱中心化する。そしてそこでその都度無意識が「言語のように構造化される」のだ。私はそこで、想像界の攻撃性のみを軸に——家族の不動の布置関係という外的条件をワロンのようにもちださず——象徴界に「接木」⁽³⁶⁾（移行ではない！）したラカンを論じたいが、その前に言うべき事がある。

それは、ラカンが理論化が現実の科学的反映どころか必然的に神話化するといっていることである。これはフランス合理主義への大いなる皮肉である。フロイトのエディプス・コンプレックスは神話である。だがクロノス

的時間に乗ってそれに観察的事実を対置したり、ドウルーズやガタリのように「欲望する諸機械」なる外部を安易にたてて神話をかたづけ（『アンチ・オイディプス』）のではなく、神話を「折りずらす」神話化が理論化なのだ。それこそが理論を実証主義から隔離し神格化を拒絶できる。

「人間の欲望は他者」（一九五四年時点では大文字ではなかった）の欲望であるという定式は、すべての定式同様、場をわきまえてあてはめなければならぬ。この定式は一つの意味でだけ有効ではないのだから。それは私共が出発した次元、想像界における籠絡キャプチャーの次元でも有効ではある。しかし……それだけではない。それだけでしたら、神話的なり方で、*d'une façon mythique* 既に申し上げたことだが、ヘーゲル先生のおっしゃる通り、意識間の共存をどのように相互に根源的に我慢ならんとする人間関係しか可能でなくなるからだ——すべての他者は本質的に、人間存在から、その対象ばかりでなく、欲望の形式さえも奪いとる者であり続けるからだ。⁽³⁷⁾

この「形式」は次に論ずるとして、ラカンの神話こそ

論理なのだ。想像界の先行性について彼が「時間的なものではなく、論理的な *Jordige* もので、私共はそこで演繹をしているにすぎない。」⁽³⁸⁾と云っている通りである。ワロンにとって大袈裟と見えた事態は、ラカンの理論的神話が演出した効果だったのだ。

そこで次に、欲望の形式にかかわる、また想像界と象徴界との「接木」にかかわる、*Forêt* 「遊び」についてのラカンの叙述を考察する。後期フロイトを告げる有名な『快樂原則の彼岸』(一九二〇年)に載っている例だ。想像界の回路に捕えられた十八ヶ月の子どもは、想像的他者(母(後のラカンはこの母に大文字の他場——言語で話しかけるから——を、そしてファルスを)も読みこむ)の不在を、糸巻きを投げ(あっち……実は *o o o* ……)てはひき寄せる(こっち)反覆に巻きこまれていた。ラカンはここにも攻撃性を読み、母とどこかでつながる糸巻きという「物(そのものを破壊するというまさにそのかぎり)で物を支配する。」と主張する。ワロンと違い想像界の攻撃性にこそ象徴界への「接木」の契機を見ているのだ。だが、ラカンは後のセミナー十一巻では、フロイトのように母の不在の苦痛を遊びで「制御」

「支配」したとはいわなくなる。小論はこの事を扱わないこととする。少くとも、この時点(一九五四年)でラカンは「主体の生成」「象徴界への目出度い参入」「反省主体の芽」、ヘーゲルのワロンの自己分裂をこの「あそび」に見ていないことが強調されねばならない。

ラカンはこのセミナーで前年ローマで報告した「精神分析における発話と言語活動との機能と場」の一部を除いてそのまま引用し言葉をさしはさんでもいるのでそれを引用しよう。

「フロイトが言っているように〔セミナー発言〕、主体が喪失状態をひきうけることでその状態を支配するばかりでなく、その瞬間に主体は第二の能力へと欲望をもちあげていることが今や理解できる。というのも、主体の行為は、挑発——本来の意味での声による〔セミナー発言〕——しながら対象を出現させ消滅させて対象を破壊しているからである。対象の不在と現前を先取りするのが挑発である。こうして、主体の行為は欲望の諸力の場を否定し、それ自身が固有の対象となる。……子どもは今や、想像的な相棒〔糸巻の姿の〕に話しかけるにせよ、実際の相棒に話しかけるにせよ、相棒が等し

く自分の物言いの否定性、negativeに従っているのを見ることになる。——というのは、忘れないでいただきたいが、子どもがあっちという時対象が目の前にあり、こっちという時対象は目の前にないから「セミネール発言」——そして子どもの呼びかけが相棒を消失せしめる効果をもちながらも、相棒を消失しつつ肯定して「ローマ講演は「出頭命令」、あの「他者の」欲望に自分の対象を「ローマ講演は「自分の欲望にその相棒を」」従わせる復帰の挑発を求めることになる」。

セミネール十一巻では、「あっち」という記号表現 (s1) と「こっち」という記号表現 (s2) とは端的に分離したものではなく、s1をたてるとたちまちs2がたち、s1はs2に対して主体を代理表象するが、s2の方は効果として主体の「消失」をもたらず、つまり「主体がどこかで意味として現われると、別のどこかで主体は消失」[絶滅するのではなく、うすれゆく、fade]する。]へあちらをたてればこちらがたらず——ラテン語のvel]で示される〕事態が語られる。主体が記号表現の連鎖に巻きこまれ、主体がいわば幻想されながら消失する皮肉な過程がクローズアップされていた。ここでは、ラ

カンは fort を「いない」の意味に da を「いる」の意味にと、大人の既存の意味づけにと還元している節がある。パートナーたる糸巻の姿をした「対象」が不在の時に「いる」からこそ、現前する時に「いない」からこそ「否定」とみえるからである。しかしこの水準でも、この「否定」を「無視」と言い換えたラカンは示唆深いと思う。「無視」という時、「反省主体」による通俗的な記号表現の連結以上の何かが見えてくるからだ。大文字の他者の記号表現の連鎖に巻きこまれた主体はその物言いのただ中で皮肉にも去勢の「不安」を「無視」し、その背後にあのファルス(男根だが、ペニスではない。ファルスには大きくなりたいハ勃起のニュアンスがあるが決して実体的なものではなくむしろ無に近い穴の如き何かだ)を予感させる。

ラカンはユンクやフロイト主義者と異なり無意識を実体化しないから、この「無視」のはたらきにその都度つむぎだされるものを無意識とする。その時、私たちは、あの主体の無知を安易に云々できなくなるのであり、かつまた「自己教育の主体」「反省主体」「土着の文化を豊かに担った主体」など感傷主義と思えてくるのだ。

「分析にあつては、私共〔分析家〕が主体を暗黙のうちに真実の探究へと巻きこむ瞬間から、主体の無知を構成し始めるのは私共なのだ。……だからこの無知は純然たる無知ではない。それは……主体という静態のまともでは、無視と呼ばれる。」「主体が何かを無視できるということは、この無視のはたらきが何をめぐってなされているかを主体が知っていないなければならない。……承認したくない何かがあることを知っている……」⁽⁴³⁾

シヨシャーナ・フェルマンは、フロイトの無意識の発見は、フロイト自身の無意識の発見であった事実を踏まえて、伝統的教育学が知への欲望（主知主義）を仮定してきたとみなし、「むしろ知に対する抵抗を相手にするのだ。無知は一種の熱情である、とラカンは示唆する。」⁽⁴⁴⁾とまで宣言している。しかし私は「抵抗」はただけでない。分析家も教育家は記号表現の動きに巻きこまれつつも、それにほだされないので、その都度「抵抗」ではなくかすかに「無視」されている何かを構築する——自分の欲望につきあたる——二牧腰とユーモアが必要だからである。教育家は主体を無知（未分化・無意識）としてムチを振り振りのスズメの学校の先生——ラカンは自我の

整形外科といった——となる誘惑、主体を自律的な反省の主体として、誰が生徒か先生か分からぬメダカの学校の先生となる誘惑に抗しなければならぬ。尊敬せよ、そして追いつくすなといった二重拘束（ペイトソン）の情念、ライバル関係を募らすミメチズムの暴力的な力（ジラル）を認めた上で、「発話のもやい綱を解く」二牧腰が必要なのだ。

この方向は、リカード的な労働価値説の文脈でマルクスの『資本論』を読んできた傾向を覆すであろう。ワロンは商品論の註（18）に、主体の写鏡関係——往還運動 *va-et-vien*（反転）——だけを読んだのであった。⁽⁴⁵⁾しかし、註（18）はフランスの諺「聖ペテロの像の覆いをとれば聖パウロの像に覆いがかかる」（あちらをたてればこちらがたたずの皮肉な事態）とからむもので、この註の直前の本文でマルクスが引用したアンリ四世の「パリもやっぱりミサに値する！ Paris vaut bien une messe!」⁽⁴⁷⁾こそは、パリというシニフィアンとミサというシニフィアンの奇妙な連鎖を暗示しているのである。私は、商品語の世界に、欲望と競争の世界、主体と他者の問題を探る努力をラカンによってこそ強いられたのだ。この努力

の中でこそ「成人教育論」は構築されねばならない。素朴にみえる Fort-da あそびは、価値形式論、成人の欲望論にも何かを照らしている。

- (3) H. Wallon, "Le rôle de («l'autre») dans la conscience du «moi»", 1946, *Enfance*, numéro spécial, p. 92.
- (4) Ibid., p. 92.
- (5) Ibid., p. p. 92—3.
- (6) Ibid., p. 93.
- (7) Ibid., p. 93.
- (8) Ibid., p. p. 354—5, "Niveaux et fluctuations du moi", 1956.
- (9) Ibid., p. 356.
- (10) Ibid., p. 356.
- (11) Ibid., p. 355.
- (12) Ibid., p. 356.
- (13) Ibid., p. 356. 大文字の他者 A、小文字 M=A, M>A, M<A, 他者認識を長下不等式や参照とした。
- (14) Émil Jalley, *Wallon lecteur de Freud et Piaget*, cf. pp. 232—4, p. 242.
- (15) Henri Wallon, *L'évolution psychologique de l'enfant*, Paris, A. Colin, 17^e édité., 1968, p. 106.
- (16) Ibid., p. 107.
- (17) Ibid., p. 109.

- (18) Ibid., p. 111.
- (19) フロンの『活動から思考へ』(一九四二年)の副題は「比較心理学の試み」である。
- (20) フロンは『資本論』二版後記で、「レーナル弁証法を「レナール」に代えて「折のちん」(unstülpig) (Karl Marx, *Das Kapital*, Werke, vol. 23, Dietz, S. 27) にするべき」の意を述べた。
- (21) "Kineshésie et image visuelle du corps propre chez l'enfant," *Enfance*.
- (22) J. Lacan, "Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je", *Écrits*, Paris, Seuil, 1966.
- (23) op.cit., "L'agressivité en psychanalyse".
- (24) op. cit., p. 112.
- (25) op. cit. p. p. 65—6.
- (26) op. cit., p. 104.
- (27) H. Wallon, *Les origines du caractère chez l'enfant* P. U. F. 5^e éd. 1973, p. 283.
- (28) Ibid., p. p. 257—260.
- (29) J. Lacan, *Le séminaire*, livre I, Seuil, 1975, p. 194.
- (30) Ibid., p. 193.
- (31) Ibid., p. 193.
- (32) Ibid., p. 200.
- (33) *Écrits*, p. 100.
- (34) *Le séminaire, livre I*, p. p. 209—210.

- (35) "Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien," 1960, *Écrits*, p. 817.
- (36) 《se brancher》, *Le séminaire*, livre I, p. 202.
- (37) *Ibid.*, p. 200.
- (38) *Ibid.*, p. 193.
- (39) *Ibid.*, p. 195.
- (40) *Ibid.*, p. 196.
- (41) *Le séminaire, livre XI*, p. 199.
- (42) *Le séminaire, livre I*, p. 189.
- (43) *Ibid.*, p. 190.
- (44) ノルマン『ラカンと洞察の冒険』誠信書房、森泉弘次訳、一八九ページ——これのみ原書が手元にならぬので訳文を拝借した——。
- (45) *Le séminaire, livre I*, p. p. 204—5.
- (46) *Enfance*, p. 68.
- (47) *Das Kapital*, S. 67.

(国学院大学講師)